

第7章 伊予における弥生時代の周溝状遺構

1. はじめに

昭和55年・56年の松山市文京遺跡の調査では、溝が円形や方形に巡るいわゆる周溝状遺構を検出した。特に、昭和56年度の3次調査（S X 1）では、周溝内より完形の土器が10点余り出土し、注目される遺構となった。その後、松山平野の弥生時代集落では少数であるが、周溝状遺構が検出されるようになった。

愛媛県では、周溝状遺構に関する研究は稀薄である。ただし、栗田茂敏氏と宮本一夫氏による調査所見は、周溝状遺構の機能を考える上で重要な提言といえる（註1）。両氏は、遺構の検出状況、遺物の出土状況、周溝の埋没状況より、周溝状遺構は祭祀的遺構と判断している。現在では、周溝状遺構の認識は両氏の所見を支持するむきが強い。

本稿は、周溝状遺構の研究を進展させるため、基礎資料の作成と、遺構・遺物状況について整理をするものである。

2. 資 料

伊予においては、現在までに周溝状遺構の検出例は松山平野に限られ、6遺跡11例が知られている。

①文京遺跡 平野の北部に位置し、伊予を代表する弥生集落である。平成7年度までに13次の調査がなされ、2・3・10次の調査地点では、周溝状遺構が検出されている。

2次調査S X 1（註2） 弥生時代中期後葉から後期前葉まで集落遺構群のなかにある。遺構は、近現代に4分の1が削平されている。平面形態は円形で、規模は直径（周溝の内縁間）1.9m、面積（周溝で区画された中央部）3.4㎡である。周溝は幅0.5～0.9mで、断面形態は逆台形状を呈する（註3）。遺物は、周溝の南部分で壺の胴部片と高坏の脚部片が集中して出土している。時期は、後期前葉である。

3次調査S X 1（註4） 2次調査地の北東約100mにある。弥生時代中期後葉から後期前葉の竪穴式住居群に接している。平面形態は隅丸方形で、規模は短辺3.2m、長辺4.0m、面積16.7㎡である。周溝は幅120～150cmで、断面形態は逆台形状を呈する。遺物は完形品を含む大型の土器片が四隅付近に出土し、特に南東部に集中している。土器には甕・壺・鉢・高坏があり、壺には頸部以上を打ち欠いたものや、形態には吉備地方に類似するものがある。また、調査者によると、「周溝埋土は人為的に埋め戻された状況にある」という。時期は、後期前葉である。

10次調査S X 14（註5） 2次調査地の西に隣接する。弥生時代中期後葉から後期前半までの竪穴式住居址や掘立柱建物に接している。平面形態は円形で、規模は径2.3m、面積5.7㎡である。周溝は幅70～90cmで、断面形態は逆台形状を呈する。遺物は、完形品の土器が多く、特に南東部と北西部に集中している。また、南東部の土器は溝底にあり、そのほかの土器や石器は溝底よりやや浮いた状況で出土している。土器には甕・壺・高坏があり、大型の複合口縁壺は焼成後の穿孔がみられる。時期は、後期前葉から中葉である。

②釜ノ口遺跡 平野の北東部に位置し、弥生時代後期の集落遺跡である。

1次調査特殊遺構（註6） 平面形態は円形で、規模は径0.6～0.7m、面積3.2㎡である。周溝は幅60

～78cm、断面形態は逆台形状である。調査時の写真からすると、中央部の範囲は西に若干広がる（約2m²）状況にある。遺物は出土がない。時期は、周囲の遺構から推定すると後期と考えられる。

6次調査地円形特殊遺跡（註7） 平面形態は円形で、規模は径3.3m、面積9.5m²である。周溝は幅30～55cm、断面形態は逆台形状である。溝の深さは15cmであることから、遺構の上部は大きく削平されていると考えられる。遺物は、土器片が少量出土している。時期は、後期前葉である。

③枝松遺跡5次調査周溝状遺構（註8） 松山平野の北東部にある弥生時代後期の集落遺跡。平面形態は円形であるが、隅丸方形に近いものになる。規模は径5.5～6.5m、面積34.4m²である。周溝は幅40～86cmで、断面形態は逆台形状を呈する。遺物は、復元すると完形品となる土器2点があり、北東部と南西部に出土が多くみられる。土器には、甕・壺・鉢がある。時期は、後期後葉である。

④福音小学校構内遺跡SD1・SX300（註9） 松山平野の中央部にある弥生時代中期後葉から後期の集落。調査地内からは、周溝状遺構が2基検出されている。

SX300は、平面形態が隅丸長方形で、規模が3.8×6.2m、面積26.3m²である。周溝は幅34～78cmで、断面形態は逆台形状を呈する。遺物には甕・壺・鉢・高坏・器台などの土器があり、復元完形品が3点含まれる。遺構内には、柱穴が30基余りあるが、本溝に伴うかは不明である。時期は、後期後葉である。

SD1は、SX300の北東100mにある。平面形態は円形で、規模は径4.0～4.2m、面積13.2m²である。周溝は幅22～40cmで、断面形態は逆台形状を呈する。周溝は一部未検出であるが、これは後世の削平によるものと考えられる。出土遺物はない。時期は、特定できない。

⑤南久米片廻り遺跡1次調査周溝状遺構（仮称、註10） 福音小学校構内遺跡の南1kmにある。弥生時代後期から古墳時代前半期の集落遺跡。遺構は終末の堅穴式住居に切られ、北半分は消失している。さらに溝の深さは10cmと浅い部分があり、遺構上部は大きく削平されている。平面形態は円形で、規模は径4.3m、推定面積11.7m²である。周溝は幅34～60cm、断面形態は逆台形状を呈する。遺物は、弥生土器片が少量ある。時期は、後期後半か。

⑥姫原遺跡SD17・SD30（註11） 松山平野の北部にある弥生時代中期から後期の集落。周溝状遺構は2基を検出している。

SD17は、東半分が調査区外になり、2分の1を検出したにすぎない。平面形態は円形で、規模は径6.4m、推定面積30.9m²である。周溝は幅50～60cmで、断面形態は逆台形状を呈する。遺物は、溝の北部に集中し、土器には甕・壺があり、完形の土器5点が出土している。時期は、弥生時代後期後葉である。

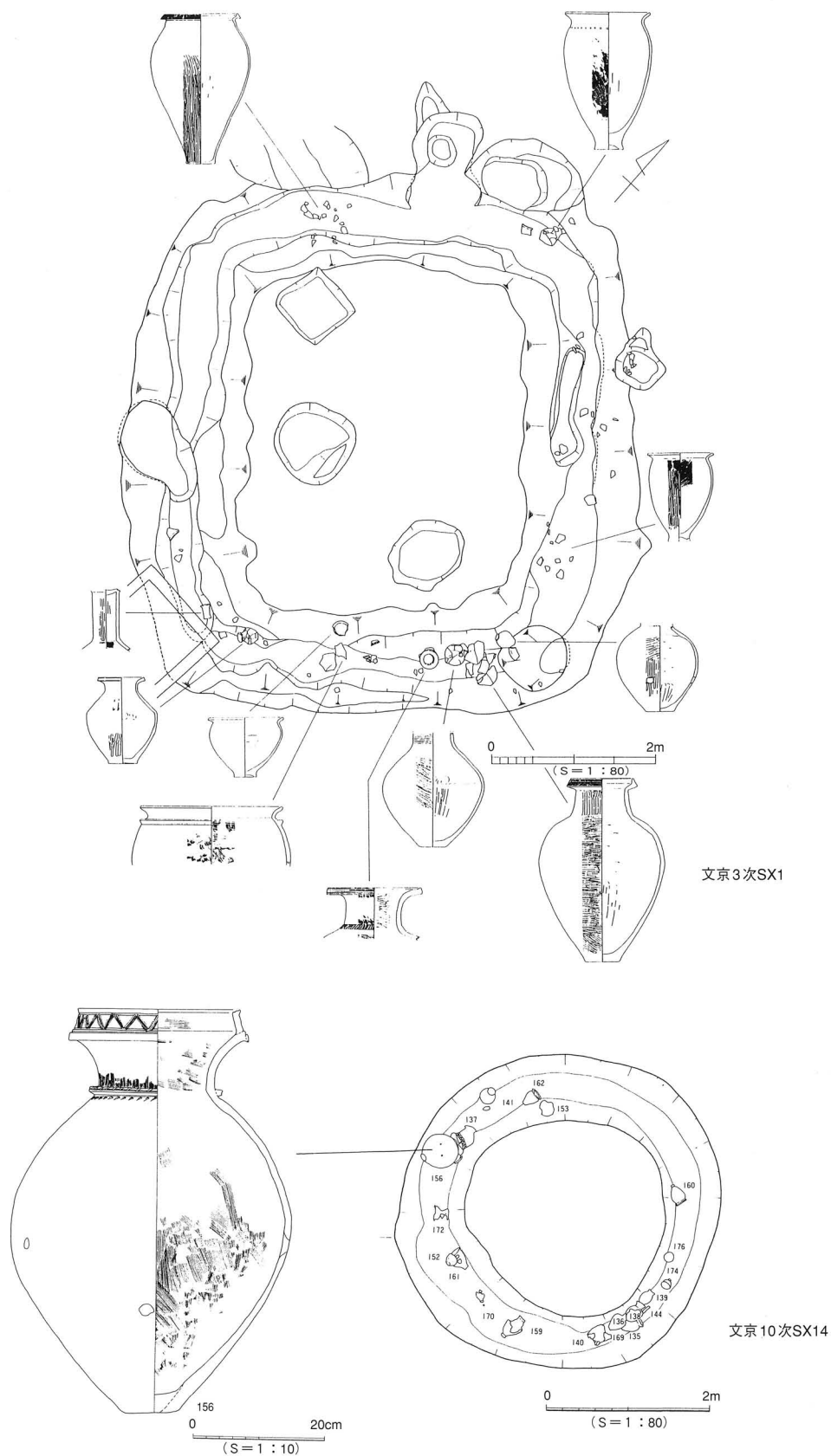
SD30は、約4分の1を検出したにとどまる。平面形態は円形と想定され、規模は推定径4.4m、推定面積15.0m²である。周溝は幅60～140cm、断面形態は逆台形状を呈する。遺物は周溝の北東部で、高坏の坏部が1点出土している。時期は、中期後葉である。

3. 分 析

ここでは、遺構と遺物に関する整理をおこなう。

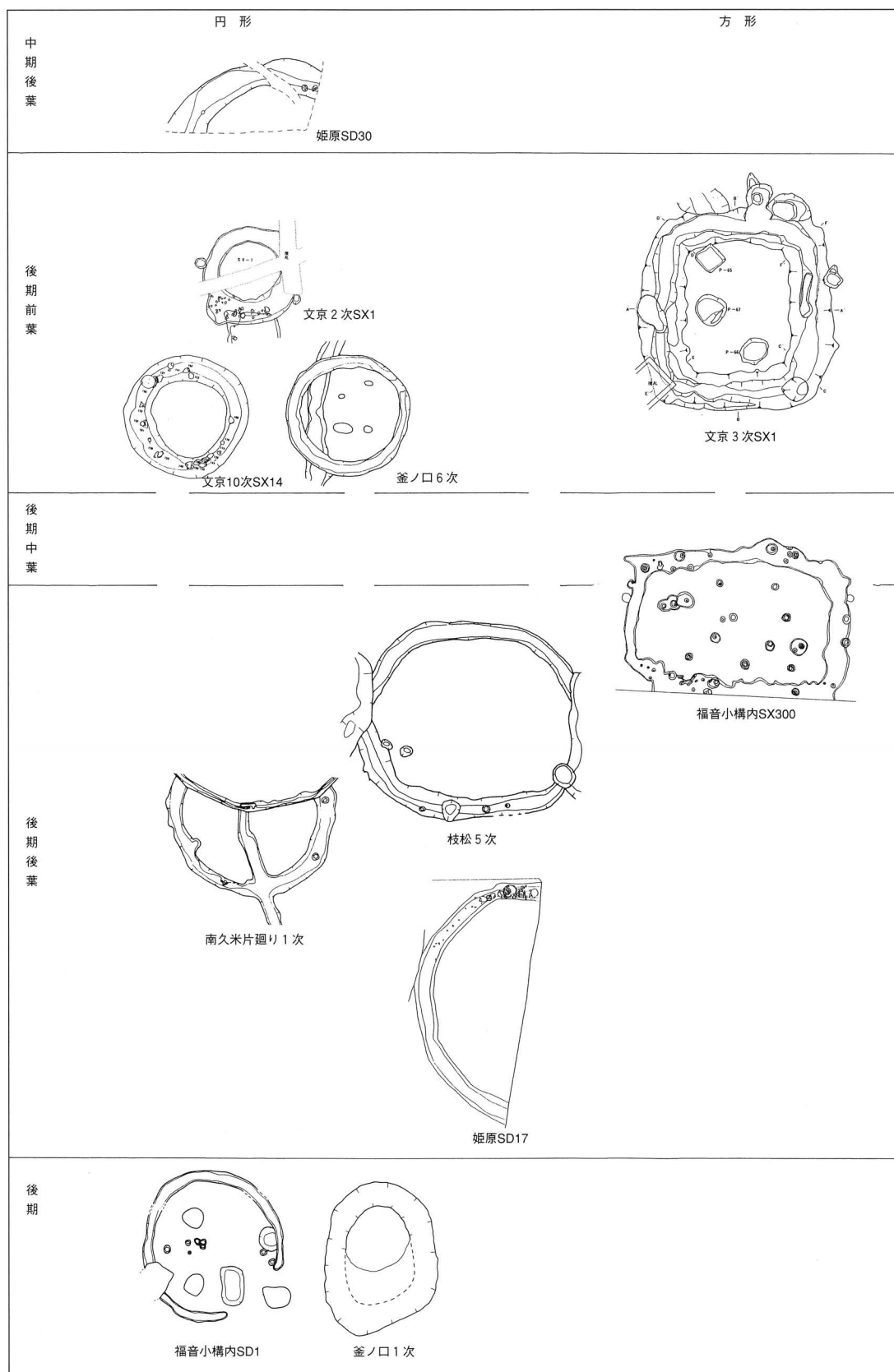
1) 遺 構

まず、時期についてみる。現在までの最古例は、中期後葉の姫原遺跡SD30である。その後は、後期前葉から中葉は文京遺跡の各遺構があり、後期後葉には福音小学校構内遺跡、姫原遺跡などでみ



第83図 文京3次SX1・10次SX14 遺物出土状況

伊予における弥生時代の周溝状遺構



第84図 伊予の弥生時代周溝状遺構

(S = 1 : 200)

れる。なお、後期終末には検出例がない。

次に、遺構の平面形態と規模についてみる。平面形態には、円形と四方形（方形ないし長方形）がある。

円形は、中期後葉に検出例があり、後期後葉までみられる。円形周溝の規模は、20㎡未満のものは継続してみられるが、25㎡を越えるものは後期後葉の検出例に限られる。

平面形態が四角形のものは、後期前葉から後葉までにみられる。規模は、16㎡と26㎡があり、広さに多少の差がある。

周溝は遺存状況により規模が異なるが、溝幅が2mを越えるものはない。また、断面形態は総じて逆台形状を呈している。

2) 遺 物

遺物は、周溝内からは出土するが、区画された中央部からは出土しない。

周溝からの遺物は、文京遺跡10次 S X 14を除くと、土器に限られている。土器は、完形品の出土例が半数におよび、出土状況では周溝の幾つかの地点に集中する傾向をもつ。器種は、壺と甕が多く、高坏や器台の出土は少ない。

また、文京遺跡3次・10次調査出土品には、穿孔をもつ壺や頸部以上を打ちかいた壺もあるが、大多数の土器は日常用の土器と形態や施文が異なることはない。

なお、土器以外の遺物は稀で、文京遺跡10次 S X 14で石庖丁や鉄製品の出土があるが、これ等の遺物は当初より S X 14に帰属するかは定かでない。

4. まとめ

伊予における周溝状遺構は、中期後葉以降に竪穴式住居や掘立柱建物に隣接して構築され、その数は文京遺跡にみられるように一時期に1基と限られている。

形態には、円形と四角形があるが、現時点では明確な機能差は認められない。規模は、後期中葉までは10㎡代と狭いものが主体となすが、後期後葉には大規模なものが多くなる。

出土遺物では、周溝に完形の土器が一括投棄される状況が認められるが、土器自体が特別な形状を呈しているわけではない。また、器種構成も日常と大差ないものである。

さて、周溝の内側にある平坦部には、施設の痕跡はなく、周溝内においては土器棺や人骨等の埋葬に関する遺物の出土はない。

よって、周溝状遺構には、土器を一括投棄するといった祭祀的行為はみとめられるが、埋葬に関する資料は完無である。

本稿では、周溝状遺構の資料収集を行い、分析項目とその傾向を提示した。今後、周溝状遺構の研究課題は、出現及び推移の検証と、機能の解明にある。また、調査課題は、周溝内での遺物と埋土の関係把握にあるだろう。

なお、本稿の作成にあたり、西尾幸則氏、栗田茂敏氏、高尾和長氏、相原浩二氏、河野史知氏、武正良治氏には資料を提供していただいた。また、資料収集には水口あをい氏、浄書には平岡直美氏の協力を得た。末尾になったが、記して感謝の意を表すものである。

表44 伊予の弥生時代周溝状遺構一覧

番号	遺 跡	遺構	平面	規模(m)	面積(m ²)	周溝断面	周溝幅(cm)	出 土 物	時 期	文献	備 考
1 a	文京2次	SX1	円形	1.80×1.96	3.45	逆台形	50～90	土器	後期前葉	註2	
b	文京3次	SX1	隅丸方	3.20×4.00	16.7	逆台形	120～150	土器	後期前葉	註4	完形品、外来系土器
c	文京10次	SX14	円形	2.38×2.30	5.75	逆台形	70～90	土器・鉄器・石器	後期前葉	註5	完形品
2 a	釜ノ口1次	特殊遺構	円形	0.60×0.78	3.20	逆台形	60～78	出土物なし	後期か	註6	
b	釜ノ口6次		円形	3.30×3.05	9.56	逆台形	30～55	土器	後期前葉	註7	
3	枝松5次		円形	6.50×5.50	34.45	逆台形	40～86	土器	後期後葉	註8	完形品
4 a	福音小構内	SX300	隅丸長方	6.20×3.84	26.36	逆台形	34～78	土器	後期後葉	註9	
b	福音小構内	SD1	円形	4.00×4.28	13.2	逆台形	22～40	出土物なし	後期か	註9	
5	南久米片廻1次	円形周溝	円形	4.35×	(11.75)	逆台形	34～60	出土物なし	後期後葉か	註10	
6 a	姫原	SD17	円形	6.44×	(30.96)	逆台形	50～60	土器	後期後葉	註11	完形品
b	姫原	SD30	円形	(4.40)×	(15.04)	逆台形	60～140	土器	中期後葉	註11	

〔註〕 ①（ ）は推定値。②規模と面積は中央部の値。③周溝幅は上場間。

〔註〕

- 1) 栗田茂敏 1992 「Ⅲ 3次調査の概要 (3) 方形周溝状遺構 S X 1」『文京遺跡―第2・3・5次調査』愛媛大学、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
宮本一夫 1991 「第3章 遺構と遺物 (6) 円形周溝状遺構」『文京遺跡第10次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 2) 栗田茂敏 1992 「Ⅱ 2次調査の概要」『文京遺跡―第2・3・5次調査』愛媛大学、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 3) 断面形態は、「V」字状と、逆台形に2大別したものをを用い記述した。よって、報告と一部異なるものがある。
- 4) 栗田茂敏 1992 「Ⅲ 3次調査の概要」『文京遺跡―第2・3・5次調査』愛媛大学、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 5) 宮本一夫 1991 『文京遺跡第10次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 6) 岸 郁男・長井数秋・大山正風 1973 『釜ノ口遺跡調査報告書』釜ノ口遺跡発掘調査団、松山市教育委員会
- 7) 高尾和長 1997 (近刊)「釜ノ口遺跡 6次調査地」『釜ノ口遺跡Ⅱ―第6～8次調査』松山市教育委員会、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 8) 本書の第3章。
- 9) 梅木謙一・武正良治 1995 『福音小学校構内遺跡―弥生時代編―』松山市教育委員会、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
なお、S D 1 は報告書13ページ第7図に位置図の掲載があるが、詳細は次号の報告にておこなう予定である。よって、本資料は武正氏の配慮による。
- 10) 栗田茂敏 1987 「南久米片廻り遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会
なお、遺跡・遺構名については仮称である。
- 11) 相原浩二 1995 「姫原遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』松山市教育委員会、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター